

「オネエ所長の調査ファイル」 # 17

山崎浩治

1

「カラオケで西野カナ熱唱して号泣するのはやめてください！ ゆうべ、『スナック香澄』にいた人みんな、ドン引きしてたじゃないですか。一体何があったんです？」

「片思いしてる男が他の女に恋する視線を送ってるのよ。それ見てたら、真っ逆さまにおちてディザイアという気分になったの！」

「それってオレとアヤカちゃんのことじゃないでしょうね」

「深くて暗い河があるのは男と女の間だけじゃない。オネエとノンケ男の間にもあるの。だけどあたし、涙の数だけ強くなる。いつか笑って話せる日もくるわ」

「ああ、それで中森明菜と野坂昭如、岡本真夜と中島みゆきも歌ってたんですね。って、自分の気持ちを歌詞のように表現しないでください！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が平日の夜、金沢市内の住宅街で張り込みをしている。ミモレ丈のスカートにデニムジャケットで春の装いとなった市山はアイホール全体にシャドウを塗り、アイラインをまぶたの際からしっかり引いている。本人的にはブリジッド・バルドーを意識した`小悪魔メイク、らしいが、客観的には`悪魔のコスプレ、そのものだった。

今回の依頼人は金沢市に住む専業主婦・友美(50歳)である。一人娘の家事手伝い、千尋(22歳)が失恋して自室に引きこもり、「死にたい」と漏らしているので助けてほしいという依頼だった。そこで手始めに千尋と交際していた外資系IT企業社員・将太(26歳)の素行調査を行っているのだ。透がまじめな顔をして言った。

「失恋ごときで死んじゃダメですよ。依頼人の娘には所長を見習ってほしいな。こんな姿になっても悲観せず、力強く生きてるんだから！」

「`こんな姿、とは何よ！ あたしは好きでやってるの！」

その時、とあるワンルームマンションの一室から、将太と年上らしき仁美(29歳)が連れ立って現れた。

2

数日後、市山は調査結果を報告するため、依頼人の友美ではなく、当事者である千尋を「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに呼んだ。やってきた千尋はボサボサ髪にノーメイク、安っぽい上下スウェットという姿だった。年相応のオシャレを放棄したこの子は自分を心底嫌っているようだ、と市山は思う。

「東京の有名大学を卒業後、外資系一流IT企業に就職。現在は海外留学を視野に休職中……それがあなたと付き合っていた将太のプロフィールだったわね。結論から先に言うけど、すべて真っ赤なウソよ」

市山の言葉を聞いてもたいした反応を見せない千尋はうつろなまなざしで窓外の風景を眺めて

いる。ダンディなスーツ姿で男に戻っている市山が続けた。

「あなたたちが知り合ったSNSに、うちの調査員が女性を装って登録したの。すると将太が早速、接触してきたわ。それで会う約束をして、やってきた彼を尾行して居場所を突き止めたわけ。もちろん、デートの約束はすっぱかしたけどね」

千尋は虚空を見つめ続けている。

「いまは3歳年上の女性会社員の部屋に転がり込んで。ヤツはSNSで知り合った女をたぶらかし、食い物にする詐欺師だったのよ」

「そんなことだろうと思ってた……」

千尋が投げ出すように、言葉を吐き出す。その瞳には将太に対する怒りも憎しみも感じられない。この子は本気で死にたいと願っている、と市山は直感した。

「オネエ言葉で分かると思うけど、あたしの心の性は女よ。でも体はこの通り、男なの。おかげで死のうと思ったことなんて数え切れないわ」

市山の言葉に、千尋が初めて感情を動かした。

「あなたが悩んでいることを、あたしは簡単に解決できない。でも一緒に考えることはできると思うの」

「結局、何もできないくせに」

「だからって、こんな悪党のためにあなたが死ぬの？ そんなことよりさ、一緒にアイツを懲らしめてやりましょうよ！」

「アイツを……懲らしめる？」

「そう！ 復讐してやるの！」

千尋がいまにも泣き出しそうな表情で、市山をにらみ返す。その瞳に光が宿ったのを市山は見逃さなかった。

3

中学生の時、不登校になった。イジメられたわけではない。小学校以来の親友がイジメられているのを見て、何もできない自分が嫌になったのだ。不登校のまま、中学を卒業し、進学した高校でも引きこもりを続けて中退。その後、フリースクールを経て高卒資格をとり、4年制大学に入学したものの、実学系の勉強に興味があるわけではなく、周囲になじむことができないこともあって1年の夏ごろには中退し、「家事手伝い」という名のニートになった。

「働きたくない」と思ったことは一度もない。むしろ、できることなら働きたい。けれど職場に行くとは恐怖で足がすくんでしまうのだ。コンビニのレジや飲食店の接客など、いくつかのアルバイトを転々としたが、どれも1カ月と続かず、バイトと引きこもりを繰り返すうち、瞬く間に数年が過ぎた。

いまでも就職して自立したい気持ちはある。けれど年単位でブランクのある履歴書は就活の際に大きなマイナスとなる。特別な資格を持たない上、人付き合いは極度に苦手、時折、家の中にある菓をありったけ飲んだら死ぬかな、などと夢想する人間をわざわざ採用しようという会社

は少ないだろう。

外部と接触はインターネットのみという千尋の居場所は、自分の部屋だけだった。そこでしていることと言えば、ネットにゲーム、マンガ三昧の日々。人はこんな生活を「気楽でいい」と言うかもしれないが、無為な生活というのは死ぬほど退屈なのだ。いっそ本当に死んでしまおうかと、と楽に死ぬる方法を紹介する自殺サイトを見て回るようになったころ、SNSを通して出会ったのが、多忙な仕事で体調を崩し、現在は休職中というIT企業社員の将太だった。

好きな音楽やゲーム、マンガのことで盛り上がり、2週間ほどメッセージをやりとりした末に初めて会った。見た目はさわやかな草食男子。千尋の話に熱心に耳を傾けてくれ、夢のような時間を過ごす。その後もお茶や映画など何度かデートをしたけれど、指一本触れてこない紳士的な態度に「この人となら幸せになれるかもしれない」と思い、一夜をともにした。初めての男だった。恋にのめり込み、我を忘れた。そんなある日、将太が切り出した。

「IT業界でステップアップするために海外留学しようと思うんだ。だけど資金がほんの少し足りないんだよね。絶対に返すから貸してくれないか」

両親に「就職するために通信教育で資格を取りたい」と告げて50万円を借り、将太に渡すと、それきり連絡が途絶えた。枝がぽきんと折れた気がした。もう生きていても仕方がない。それが悩み抜いた末に得た千尋の結論だった。

4

市山と透が将太のいるワンルームマンションに赴いたのは、千尋が「プライベート・リサーチ」を訪れた翌日のことである。

「千尋さんからの伝言よ。あなたに貸した50万円を即刻返済してほしい。もし返さないようなら、千尋さんは裁判も辞さないわ」

ブランド物の部屋着をオシャレに着こなして応対する将太の肩越しに、不安そうに市山をうかがう仁美の顔が見える。薄ら笑いを浮かべた将太が言った。

「オレ、その女から金を借りた覚え、ないけど。借用書あるの？」

「ないわ。千尋さんはあなたを信用して50万円を貸したの」

「それじゃ、オレに50万円貸したという証拠を持ってきてよ。それが順序でしょ」

「あなたは千尋さんからお金を借りていない、と主張するわけね」

「裁判を起こすなら勝手にどうぞ。でも、裁判するにしたって50万ぼっちの請求金額じゃ引き受ける弁護士を探すのも面倒だと思うけどなあ」

得意げに話す将太に市山が「パチパチ」と口に出して拍手した。

「有名大学を卒業後、外資系IT企業に就職したサラリーマン……っていうのがあなたの`設定、らしいけど、調べてみると本当は高校中退の住所不定無職。離婚後、女手一つであなたを育てたお母さんは現在、生活保護を受給中。それでもあなた、法律の知識だけはマジメにお勉強したようね。偉いわ〜」

「何だと！」と気色ばむ将太に「それじゃメッセージ、伝えたわよ」と市山が世間話の続きのよ

うな口調で言い残し、その場を辞した。部屋を出るとすぐ、透が釈然としない表情で市山に聞いた。

「所長は復讐しようとすることで彼女に生きる意欲を持たせようとしたんでしょうが、あの悪党に借金の返済を迫ることが復讐だったんですか。アイツ、とても懲らしめられているようには見えませんでしたよ」

「メッセージを伝えたのはあの男ではなく、同居女性の方。細工は流々、仕上げを御覧じろ、よ」

市山が意味ありげな含み笑いを浮かべた。

5

それから数日後、将太が「同居女性の髪をつかんで床を引きずり、殴る蹴るなどの暴行を加えた容疑で逮捕」という記事が新聞に掲載された。市山の来訪によって疑念を抱いた仁美が100万円単位の借金返済を迫り、逆上した将太が暴力を働いたのである。ちなみに仁美の悲鳴を聞きつけ、すぐさま警察に通報したのは部屋の外で張り込んでいた透だった。

被害者と示談が成立し、罰金30万円を払って釈放された将太は県外に出、その後、振り込め詐欺グループの一員に加わった、とうわさされている。一方、千尋は後日、「金沢プライベート・リサーチ」を訪れ、「将太が逮捕されたことで目が覚めた。あんなくだらない男のために死ぬのはバカらしい。貸した50万円は人生勉強の授業料と思うことにした」と晴れ晴れとした表情で語った。

それから数カ月後、市山は心療内科に通いながらアルバイトを始めたという千尋を誘い、激励会を兼ねて行きつけの「スナック香澄」で飲むことにした。体にフィットしたスパンコールのロングドレス、黒ミサに出席するようなおぞましいメイクで店に現れた市山に、度肝を抜かれた千尋が口を開く。

「えっと……ここ、笑うポイント？」

「女の子のお洋服を着るとあたし、魔法にかかった気分になるのよ」

「あたしには呪いをかけられたようにしか見えないけど」

おずおずと口にした千尋の言葉にトオルや「香澄」のアルバイト、アヤカが下を向いて笑いをかみ殺す。千尋は黒のゴスロリワンピース姿で、市山とは案外、馬が合うのかもしれない。市山が苦笑して続けた。

「あなた、言うわね～。でも、それくらい言えるようになれば、もう大丈夫。さあ、今夜はゝあゆ、を歌い倒すわよ！」

イントロが流れてきた。懐メロの「ブルーライト・ヨコハマ」だった。

「こんな曲、浜崎あゆみにありましたっけ」

アヤカが怪訝な表情で聞くと、マイクを握った市山がため息を吐く。

「これだから平成生まれは！　ゝあゆ、といえば、いしだあゆみでしょ！」

エコーをたっぷり利かせ、市山と「♪ブルーライト・カタマチ～」と替え歌でデュエットする

千尋がはにかんだように笑う。それは千尋が初めて見せた笑顔だった。